

# 6人制バレーボール競技におけるセッター のトス回しの重要性について

——高等学校男子チームの場合——

西 村 栄 蔵\*

## 1. 研究の目的

バレーボール競技に25点ラリーポイント制が採用されて以来、20点をとった後の最終局面において1点、1点をいかに先取していくか、そのためにセッターがどのようなトス回しをすべきかは、勝敗に直接結びつく問題だけにきわめて重要である。それには、攻撃の中軸であるセッターが、ゲーム全体の流れを頭に入れて自チームの攻撃パターンを瞬時に組み立てていく、具体的にはアタッカーを如何に動かして有効な攻撃パターンに持ち込むか、という高度な判断が求められる。

しかし、その重要性が指摘されながらも、25点ラリーポイント制採用から余り年数を経ていないこともあって、これに関する具体的な研究は皆無といえる。したがって、1点を争う拮抗したゲーム展開の中で、セッターが如何に適切なトスを行い、有効な攻撃パターンを組み立てていくかについては、学習または指導するための客観的なデータがほとんど欠如しているといつてよい。本研究では、このような問題意識から、25点ラリーポイント制ゲームの最終局面におけるセッターの攻撃パターン組み立てについて、参考となる基礎資料を得ることを目的とする。

## 2. 研究の方法

- ①研究に必要な基礎データは、広島県内高等学校の有力チームの特定のセッターを対象に、各種競技大会のプレーすべてをビデオカメラに収録した。調査対象は下記の競技大会の2年間分である。ただし、地区予選、県予選については、ベスト4以上の競技のみとした。

---

\* 広島経済大学経済学部教授

- ・全国高等学校選抜バレーボール大会地区予選および県予選
- ・中国高等学校バレーボール選手権大会県予選および大会
- ・全国高等学校総合体育大会バレーボール競技県予選および大会
- ・国民体育大会バレーボール競技

②後日、収録したビデオ画面から調査対象のセッターがどのようにトス回しをしてアタッカーの攻撃パターンにつなげたか、それによってアタッカーが点を稼げたか、さらにそれがセット獲得に貢献できたかについて詳しく記録した。記録した結果を、トス回しをしたポジション別の回数を、攻撃パターンとして整理し、考察した。

### 3. 考察と結果

表1は、有力チームSおよびそのセッターが参加した県選抜チームの12試合について、各セットにおける20得点後の試合展開を攻撃パターン別に整理したものである。セッターからトスを受けたアタッカーが攻撃するパターンを、記号L（レフト）、C（センター）、R（ライト）、G（時間差・移動攻撃）、BA（バックアタック）で示してある。また、当該チームが勝ったセットについては、そのセット番号を○で囲んだ。

高度なチームプレーが要求されるバレーボールにおいても、強力なアタッカーを擁している場合は、そこへトスを集めて確実にポイントを稼ぐことが多い。しかし、試合の後半になると、相手との間に余程の力（特にレシーブ力）の差がない限り警戒され、それは効果しなくなる。25点ラリーポイント制の20得点以降ともなると、特にそのことが言える。表1をみても、Sチームのセッターはボールをいろいろ異なったポジションに回し、相手のレシーブ陣を攪乱しようとしている。例えば、試合3のセット1および2（以下、3-1・2と記す）がそうであり、結果としていずれのセットにも勝っている。これに対して、試合1の相手チームOKはレフトにボールを集めすぎ、セットを失っている。

KチームはSチームの好敵手らしく1勝1敗の成績を残しているが、両チームのセッターの20得点以降のトス回しに、それぞれ独特の工夫が認められる。試合5では、両チームのセッターは前衛3人に巧みにボールを回しているが、さらに時間差・移動攻撃（G）を織り交ぜたSチームの方に軍配が挙がっている。ところが、Kチームもこれに負けず、試合6ではGおよびBAを織り交ぜた多彩な攻撃を仕掛けてSチームを負かしている。

以上の好試合に対して、Sチームの8-1、9-2、11-2は全く理解しがたい

表1 20得点後にSチームおよび対戦相手のセッターが組み立てた攻撃パターン

試合	セット (○は勝ち)	Sの攻撃パターン					相手の攻撃パターン					相手の チーム
		L	C	R	G	BA	L	C	R	G	BA	
1	①	0	1	1	0	0	4	1	0	0	0	OK
	②	0	1	4	0	0	2	1	1	0	0	
2	①	1	1	1	0	0	3	0	2	1	0	Y
	②	3	0	0	1	0	3	2	0	1	1	
3	①	1	1	3	1	0	3	1	1	0	0	GK
	②	2	1	1	1	0	0	1	1	0	0	
4	①	1	1	1	0	0	3	0	3	1	0	GH
	②	0	0	2	1	0	4	2	1	0	0	
5	①	0	3	6	2	0	4	3	0	0	0	K
	②	2	1	0	1	0	2	0	2	0	0	
	③	2	0	2	0	0	3	0	1	0	0	
6	1	3	1	0	1	0	5	0	3	1	0	K
	②	3	2	0	2	0	1	1	1	1	2	
	3	3	0	3	0	1	2	1	0	1	0	
7	①	2	0	0	0	0	3	1	0	0	0	TK
	②	1	2	0	0	1	4	1	1	0	2	
8	1	0	1	3	0	0	2	0	0	0	4	IK
	2	2	0	6	1	0	5	2	1	3	0	
9	①	3	1	0	0	1	8	0	2	0	0	KA
	2	0	0	5	0	0	0	1	0	1	0	
	③	2	2	1	0	0	2	0	4	0	2	
10	1	1	0	1	0	0	0	1	2	0	2	M
	2	8	0	2	0	3	7	1	1	0	1	
11	①	2	1	0	1	0	2	0	1	0	0	YM
	2	4	0	6	0	1	2	0	5	3	0	
	3	1	0	0	0	0	1	0	0	2	0	
12	1	5	0	1	0	0	1	5	1	0	0	G
	2	0	1	2	0	0	0	1	1	0	1	
	3	3	0	0	0	0	0	1	1	1	0	

(注) 試合12は、Sチームのセッターが県選抜チームの一員として参加したもの。

表2 セッターからのトスの攻撃パターン（ポジション）別・勝敗別回数

トス回しの回数	攻撃パターン（ポジション）					勝ち負け別合計
	L	C	R	G	BA	
勝ちセット	回数 25 (32.5)	18 (23.4)	22 (28.6)	10 (13.0)	6 ( 2.5)	77 (100)
	比率 45.5	85.7	43.1	83.3	40.0	53.5
負けセット	回数 30 (44.8)	3 (4.5)	29 (45.3)	2 ( 3.0)	3 ( 4.4)	67 (100)
	比率 54.5	14.3	56.9	16.7	60.0	46.5
ポジション合計	55 (38.2)	21 (14.6)	51 (35.4)	12 ( 8.3)	5 ( 3.5)	144 (100)

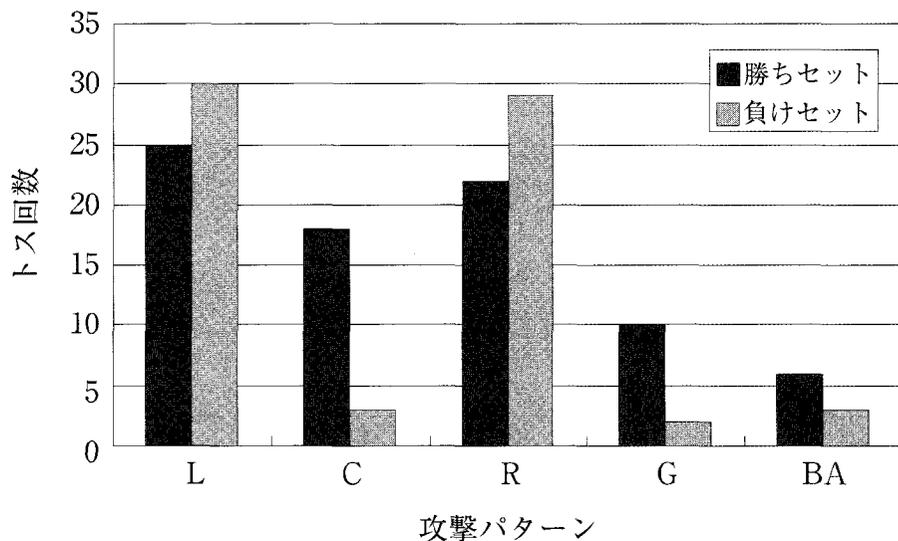


図1 攻撃パターン（ポジション）別のトス回数

試合運びである。いずれも特定ポジション（R）にボールを集めすぎているからである。結局、単調な攻撃パターンとなってセットを失っている。そこには、Rの攻撃力への過大な期待とか、相手チームのマークといった要因が絡んでいたであろう。また、12-1および3では、促成的な選抜チームにありがちな、セッター・アタッカー間の連携プレーの欠如が認められる。

トスが単調になれば、それだけ相手にブロックされやすく、またレシーブされやすい。そこで、20得点以降にSチームのセッターがどのようにトスを散らしたかを検討するため、トス回数を攻撃パターン（ポジション）別に集計した（表2）。その際に、当該セットの勝ち負け別に分けて表示した。図1は、表2の内容を実数で示したものである。アタッカーからのトス回数はL（レフト）およびR（ライト）がほぼ同数で、合わせると全体の4分の3にもものぼる。しかし、セットの勝ち負け

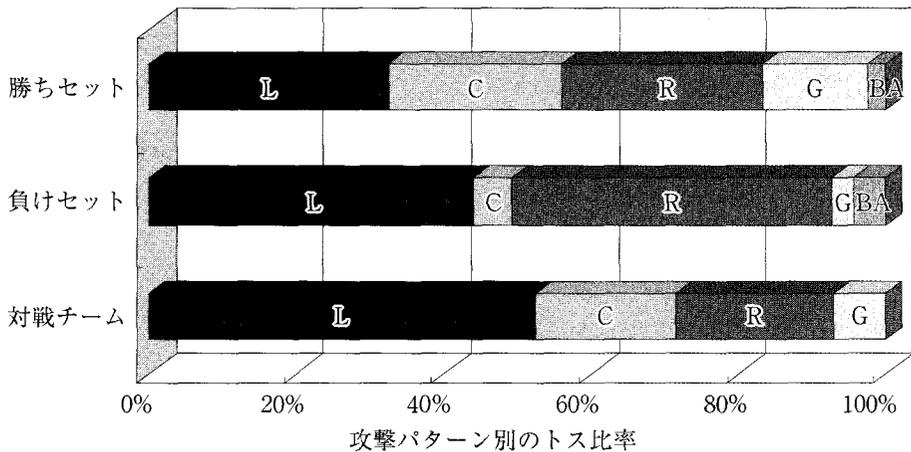


図2 勝ち負けセット別，攻撃パターン（ポジション）別のトス比率

別にみると，負けセットのトス数が勝った場合より多く，LまたはRによる正攻法が必ずしも成功しているとは言えないようである。これを表1の試合例で示すと，6-3，8-2，11-2であり，いずれもセットを失っている。一方，図2は勝ちセットのC，G，BAの回数が負けセットのそれより断然多いことを示している。前述のSチームとKチームの対戦で指摘したように，センター攻撃，時間差・移動攻撃・バックアタックを機敏に織り交ぜた，多彩な攻撃を組み込むことの有効性を証明している。

図2はSチームの攻撃パターン（ポジション）別トス回数の比率を，勝ちセットと負けセットに分けて表したものである。この図には，表1の試合1～4でSチームと対戦して負けた相手の攻撃パターンを，比較の意味で「対戦チーム」の項目で加えている。繰り返しになるが，Sチームの勝ちセットでは比較的に万遍なくトス回しが行われている。これに対して，負けセットでは極端にLとRに集中し，CやG，BAの比率はきわめて少ない。さらに，試合1～4でSチームに負けたチーム（セットすべてを落としている）では，総トス回数42の半分近くをLに集中させ，BAにはまったく回していない。このような単調な攻撃では，Sチームに対して守備を容易にさせ，攻撃に転じる機会を与えてしまうことになったと言える。

以上の考察から明らかなように，20得点以降の拮抗した試合展開においてセッターに求められるのは，相手チームのレシーブ力を冷静に読みながら自チームのアタッカーに的確なトスを回すことである。自チーム・アタッカーの能力を最大限に生かせるように，日頃から実戦的なトレーニングを積み重ねておくことこそ大切である。高等学校バレーボール競技では，いかに個人技に優れた選手を揃えていても，

セッターのトス回しいかんによって敗戦の苦渋を舐めることが多いといえる。

### あ と が き

本稿の作成に当たっては、本学地域経済研究所長藤原健藏教授に有益なご示唆をいただきました。記して謝意を表します。